

【表の見方】

①
「構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性の評価の結果」の数値を、附表「耐震診断の評価の結果と構造上主要な部分の地震に対する安全性の評価」に照らし合わせてご確認ください。
(結果の $I_s/I_{so}=1.05$ 、 $C_{TU} \cdot S_D=0.50$ を附表中の同一名の「耐震診断の方法の名称」の行に照らし合わせてください。)

※備考に記入のない場合は、
・耐震判定基本指標 $E_s=0.6$
・地域指標 $Z=0.8$
・地盤指標 $G=1.0$
・用途指標 $U=1.0$ とします。

■ 庁舎

No	建築物の名称	建築物の位置	建築物の主たる用途	耐震診断の方法の名称	構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性の評価の結果	耐震改修等の予定		備考
						内容	実施時期	
	〇〇庁舎	●●市〇〇	庁舎	一般財団法人日本建築防災協会による「既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第2次診断法」(2001年版)	① $I_s/I_{so}=1.05$ $C_{TU} \cdot S_D=0.50$			$E_s=0.7$ として診断

※同一名の「耐震診断の方法の名称」の行に照らし合わせます。

③ 安全性は下記の「Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」に区分されています。

-----構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性-----

Ⅰ：大規模の地震の震動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性が高い。

Ⅱ：大規模の地震の震動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性がある。

Ⅲ：大規模の地震の震動及び衝撃に対して倒壊し、又は崩壊する危険性が低い。

②

①を附表に照らし合わせると「 $1.0 \leq 1.05$ かつ $0.24 \leq 0.5$ 」となり区分「Ⅲ」です。

($Z \cdot G \cdot U$ については、備考に記入がない場合は $Z=0.8$ 、 $G=1.0$ 、 $U=1.0$ なので、 $0.3 \cdot Z \cdot G \cdot U=0.24$ です。)

■ 附表 耐震診断の評価の結果と構造上主要な部分の地震に対する安全性の評価

耐震診断の方法の名称	③ 構造耐力上主要な部分の地震に対する安全性		
	Ⅰ	Ⅱ	② Ⅲ
一般財団法人日本建築防災協会による「既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断基準」に定める「第2次診断法」(2001年版)	$I_s/I_{so} < 0.5$ 又は $C_{TU} \cdot S_D < 0.15 \cdot Z \cdot G \cdot U$	左右以外の場合	$1.0 \leq I_s/I_{so}$ かつ $0.3 \cdot Z \cdot G \cdot U \leq C_{TU} \cdot S_D$

■ 記号と数値の意味

* I_s : 構造体の耐震性能を示す値。この数値が大きいほど耐震性能が高い。

* I_{so} : 構造耐震判定の指標。 I_s 値の判定基準となる目標値。

* $C_{TU} \cdot S_D$: 構造体の強度、建築物の平面・立面形状等から求める耐震性能に係る指標。

* q : 保有水平耐力に係る指標と言われ、建築物の地震や風などの水平力に対して耐えることのできる強さを表す指標。

* E_s : 耐震判定基本指標で、建物に要求される基本的な耐震性能を表す指標。(第2次診断・第3次診断法では 0.6)

* Z : 地域指標で、その地域の地震活動度や想定する地震動の強さに対する補正係数。(福岡県内 0.8)

* G : 地盤指標で、表層地盤の増幅特性などによる補正係数。(一般的に 1.0)

* U : 用途指標で、建物の用途などによる補正係数。(一般的に 1.0)